HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	コメント２
著者	ブシャー，ジェレミー；Bouchard，Jeremie
引用	北海学園大学人文論集(69)：40-48
発行日	2020-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

コメント2

ジェレミー・ブシャー

人文学における倫理という，私にとってとても大切な主題についての私の見解を発言する機会をいただき深く感謝します。小柳先生，このイベントを企画してくれてありがとう。小柳さんは，人文学のご自身の領域で起きた厄介な倫理的問題と ── こう言って良いでしょう ──‘果敢に’ 取り組みました。そのことに対して，私の心からの感謝と賞賛を送ります。そしてまた，グラーフ教授ならびにここにお集まりの皆様にも，心より感謝申し上げます。私のコメントでは，人文学における，そして広く学問全般における学問上の不正行為の原因を明確にすることに集中することとして，将来においてそのような振る舞いが生じるのを防ぐための個別の戦略について議論することは，他の発言者に委ねたいと思います。端的に言いますと，私は人文学のいくつかの重要な特徴を明確にし，その土台の上で，私たちの分野では不幸なことに倫理的不正行為がいかにありふれているかを説明します。

人文学の研究は ── それが関わる知識のあらゆる他の領域も同様ですが ── 本質的に，社会的現象を記述し，説明し，望むべくは予測することの助けとなる既存の理論や方法論をさらに洗練させることを目指しています。私たちの全員が関わっているこの避けがたい道筋は，私たち相互に，高度に批判的な関わり合いを要求します。それは，私たちの既存の認識における概念的および方法論的な裂け目や矛盾を突き止めるためだけではなく，おそらくもっと重要なことですが，(a)私たちが依って立つ倫理的基盤について鋭く意識し続け，そして，(b)私たち自身の研究実践について批判的であり続けるためなのです。人文学がこの点においてなぜ独特であるのかについて，何分間か説明せさてください。

魅力的で洞察に富んだ著作である『ホモ・アカデミクス』の中で，高名な社会学者ピエール・ブルデューは，大学という文脈で発展してきた人文学が，あるいは社会科学が，いかにしてアカデミックな分類の体系から生じる入り組んだ権力構造の上で構築されてきたかを説明しています。このアカデミックな分類は，様々な仕方で，社会的な分類や階層化の隠れた手段の役割をしているのです。ブルデューによれば，人文学の教授たちは，分類された生産物であり，アカデミックな分類法の用語を用いて自分たちや他人を絶えず分類します。すなわち，野望と自尊心が分かち難く規定される自己評価の永続的な実践を形成しているのです。教授たちの野心とキャリア決定は，アカデミックな体系が実際にこの教授たちの野望について下す判断を先取りします。加えて，最も良いと分類され査定された者が，ヒエラルキーの下のレベルにいる個人によって言われたり書かれたりしたことに，本質的に正当性を与えることで ── したがって，それらを管理することで ── この分類システムを支配することになります。簡潔に言えば，この人たちは倫理的および知的な上流階級を生み出しているのです。おそらくこうした議論から導き出すことができるように，ここには二つの主要な問題があります。第一に，この発生的な分類構造は，力のある者とない者双方の，受け入れ可能で順応的な振る舞いと傾向を助長するだけだということです。第二に，絶えず変わりゆく社会的世界では，人間の知識は前方へと進み続ける土台の上で疑問に付され，改善されねばなりませんが，この社会的世界の中で，そのような分類構造はとても頻繁に，社会の客観的な関係の構造を再生産するということです。この社会とはアカデミアがそこに埋め込まれ，そもそもそうした関係の構造を生産してきたものなのですが。日本のポップ・アートや教育，政治，歴史の研究者であるブライアン・マクヴェイは正しくも，日本の大学システムへの批判において，日本の大学人の中での様々な形態のアカデミックな不正行為は，アカデミックな学歴偏重主義の産物だとみなしています。マクヴェイの見るところ，この学歴偏重主義は日本のナショナルな国家統制というより大きな政治―経済的環境の内部で理解されるべきものです。個人的には，世界中の

他のどのアカデミックなシステムについても同様の議論ができると考えています。つまり，アカデミックな自己と他者についての査定と分類の既存の ── ヘゲモニーとなっている，と言って良いでしょう ── 体系は，日本のみならずどこでも自己再生するものであり，それゆえ，新しい知識や新しい認識に適さないものなのです。これは，私たち全員が大学人や社会科学者として認識し，受け入れなくてはならない複雑な問題です。

脇道に逸れて，私たちの分野でわずかなアカデミックな知識の再生産しかないことが，なぜ問題であるのかについて，少し述べさせてください。哲学者ジャン・ボードリヤールの，四段階の経過としてのシミュラークルの秩序についての観念は，ここで明確さを与えてくれます。シミュラークルの第一段階は，忠実なイメージ／コピー，すなわち，深遠な現実の写し（例えば，写真）です。第二段階は，現実の逆用です。そこでは，象徴が現実を「隠し，変成させる」忠実ではないコピー（例えば，写真のデジタルな修正）だと見なされます。第三段階は，深遠な現実の欠如を隠します。そこでは，シミュラークルは忠実なコピーを装いますが，オリジナルのないコピーなのです。象徴とイメージは何か現実的なものを表現していると主張しますが，何の表現も起きていません。現実世界の指示対象との明白な結びつきなしに，恣意的なイメージが示されるのです。この段階では，人間らしい意味は「人工的に」，しばしばイデオロギー上の目的のために伝えられます。第四段階は純粋なシミュレーションであり，ここでシミュラークルはどんな現実との結びつきも持ちません。1981年に発表されたボードリヤールの論文は，私たちを本質的に警告するものでした。すなわち，私たちの高度に統合されたネオ・リベラルな社会では，シミュラークルが ── あるいはこれまでの議論の中の言葉で言えば，私たちが知っていることの進行的な再生産が ── 全体的な等価性の体制を構築しており，そこでは文化的な産物はもはや，現実であるとか，現実世界の対象や経験と関係していると装う必要すらないのです。これが「ハイパー・リアル」な段階，あるいは，しばしばそう呼ばれるようになったように，「ポスト・トゥルース」時代です。この，脇道での説明から私たちが理解することができ

るのは，私たちの分野での倫理的不正行為が，少なくとも部分的には，不幸なことに人文学にも共通な，知識生産の再生産と無批判的なシミュレーションのこうしたプロセスと関係しうるということです。

人文学についてのブルデューの説明に戻ると，みなさんのうちの何人かは,「そのような査定と分類の体系は，新しい研究の価値を判断するために必要なわけではないのではないか？」と問うことでブルデューに同意しないかもしれません。確かにそうかもしれません。少なくとも原理的には。しかし事実において，私たちがしばしば目にするのは，既存の知識の再生産であり，変形ではありません。なぜこういうことになっているのかを後で説明します。みなさんのうちの何人かはまた,「アカデミックな査定と分類は社会科学と自然科学の両方にとって本質的に当てはまるのだとしたら，人文学はここでどのように異なっていたりユニークだったりするのだろう？」と問うかもしれません。この疑問に答えるためにブルデューは，カントのいくらか流行遅れの，上級学部と下級学部の区別を引き合いに出し，人文学においては他の分野よりも研究者が自分たちの理由と原理に委ねられがちであることが多く，長期に渡って確立されてきた科学的なルールや規範を参照して判断される傾向は少ないと論じました。

私の見るところ, これは興味深くはあるものの, 不十分な議論です。もっと精緻で説得力があるのは，社会実在論の思想家カール・メイトンによって提供された説明です。彼の啓発的な書物,『知識と知者』の中でメイトンは，自然科学を「強い文法」── すなわち，比較的正確な経験的記述と経験的関係のモデルの生成が可能な言語を持つものと記述しています。このことはまた，自然科学が自然界での未来の出来事がいかに起きるかを比較的力強く予言する能力を持っているということも意味します。自然科学は，水平的な知者の構造によって特徴づけられるとも言われます。そのため，個々の研究者の社会的ステータスは，研究成果が既存の理論や方法論とどのように関連し活気づけるのか，そして，研究成果が既存の理論や方法論をどのように向上させるのかよりも重大なことではないのです。

対照的に，メイトンは人文学，あるいは文化研究を,「弱い文法」を持つ

ものと記述しています ── すなわち, その調査の対象と研究手続きが曖昧, つまり漠然としているのです。その予測能力は結果として，非常に限定的なものとなります。人文学は, ヒエラルキー的な知者の構造も採用します。この構造は，理想的な知者 ──「熟練の解釈者」と呼ぶことのできるもの ── と，少しずつ広がる領域へと新しい知者を統合することの上に構築されているものです。知識のこの領域では，研究者たちは，知識についての主観論者の理解を共有しがちですし，様々な種類の知者がどのように行動し，考え，感じるかについての社会的影響を強調しがちです。── そのことを私たちは「熟練の解釈者」の継続的な正当化と呼ぶことができるでしょう。

ここが，メイトンの見方が前にまとめたブルデューの見方と繋がるところです。人文学は，自然科学よりもずっと知識の社会的な側面に大きく依拠するのです。言い方を変えれば, その知識を定式化した個人の重要性が, 人文学では自然科学よりも大きいのです。このことが，時間の経過とともに人文学が進歩していく方向に根本的な影響をもたらします。メイトンによれば，文化研究は，先行して発展した知識の根本的な分裂，批判的脱構築，そして変形に大きく依存しています。すなわち，── 自然科学と同じように ── 長期間にわたって，先行する知識の上に積み上げたり，それを調整したりするよりも，社会科学者は新しい始まりや，再定義，そして過去との完全な決裂すらも宣言する傾向があるということです。知的領域としての人文学は，それゆえ，永続的な文化革命を受けているように見えます。そしてそれにより,「革命的アイデア」を所有することが，その分野の研究者 ──「熟練の解釈者」── の正当性にとっての中心になります。並行して，人文学における進歩は，過去の理論の拒絶と，新しく，より急進的な理論の導入を擁護する新しい声が加えられることによって測定される傾向があります。私たちはこの明らかな例を，多くの現代の社会科学者によって表現された，反実証主義的な，すなわちポストモダン的な視線への熱中のうちに見ることができます。本質的にポストモダンの理論は，知識についての主張はその主張を声に出す集団の社会的特徴に還元できるとい

う論点を共有しています。この論点が，中立的な声や客観的な真理という概念の批判のための基盤となっています。そうした概念は，自然科学の中ではもっと確固とした地位を持っているのですが。その代わりに，ポストモダンは，文脈主義的ならびに遠近法的な認識論を強力に擁護し，真理と語りの多様性を強調します。この点で，ミシェル・フーコーの著作 ── より正確に言えば，彼の著作の様々な解釈 ── が人文学に与えた影響は否定できません。もっとも，問題含みでないわけではありませんが。

私の見解では，これらは全て，原則的にはとても良いことです。社会科学者は，弱い文法を持って，そして知者の高度にヒエラルキー的構造の中で，とてもうまく働くことができます。しかし現実には，社会言語学の領域での私の経験を引き合いに出せば，私たちがとてもしばしば目にするのは新しい知識の主張であって，新しい知識そのものではありません。私たちが頻繁に手にするのは，局所的な現実の研究へと適用されただけの既存の理論や方法論の複製 ── あるいは無批判的なシミュレーション ── です。私にとっては，これもまた人文学に対する倫理的問題を構成します。なぜなら，社会的世界についての新しい知識や理解を生み出す私たちの能力を著しく阻害してきたからです。これらの奇妙な手続きは，自然科学では必ずしも観察されません。むしろそれらは人文学に特有のものです。人文学とはやはり，研究者が自分の理屈，理論的根拠，解釈スキルに任されることがしばしばであるような分野なのです。

私が人文学の顕著な特色に言及するのは，人文学が，自然科学を基礎づけるものよりも不明瞭な基盤と呼べるものの上で，いかに打ち立てられ，展開されてきたかを説明するためです。本シンポジウムにもっと直接に関係して，私がこのことに言及したいのは，私たちは社会科学者として，私たちが行うことと私たちが生み出す知識に対して根本的な倫理的責任を持っているからでもあります。私たちが生み出す研究は，弱い文法，理論的および方法論的曖昧さ，そして知者と熟達者の相当に硬直したヒエラルキーによって特徴づけられる種類のものなので，倫理的熟慮はとりわけ目立つものとなります。こうした議論はけっして，人文学の価値を人間に関

する知識へと引き下げることを目的としているわけではありません。全く逆です。ここまで私が述べてきたことが目指しているのは，ただ倫理的不正行為を避けるためだけではなく，私たちの研究を向上させるために，私たちの仕事のまさしく本質を明らかにすることです。

最後に，人文学がよって立つ学問性あるいは倫理的基盤を守るために私たちができることはたくさんあります。私の考えでは，こうした挑戦は私たちの分野のさらなる理論化によって始めなくてはなりません。ちょうど今，私がやってきたように。さらなる理論化によって，私たちは私たちの分野の構造と論理のより明確な理解を発展させることができます。すなわち，私たちの分野がどのように展開してきたのか，何が知識を構成しているのか，どのようにして知識と知者の両方をよりよく区分し分類するのか，そしてとても重要なことに，私たちが行うことの中心にある倫理的課題をどのように突き止めるのか，ということについての理解です。第二に，私たちは人文学における倫理的不正行為を，もっぱら個々の研究者の問題ある性格の産物だと理解するのではなく，私たちの分野の既存の権力構造の不幸な結果として理解する必要があります。私たちは，成功は組織的なものであり失敗は個人のものであるという単純なネオリベラル的原理に固執することを避けなければなりません。そしてその代わりに，研究者の共同体として私たちがどこにいて，何をするのかについての幅広い見方を発展させなければなりません。グラーフ教授は，正しくも次のように指摘しました。「研究不正はグローバルな問題です。それは，多くの先進国の学問システムにおける急激な構造上の変化と関係しています。近代の産業化された社会は，研究と技術の発展を，国家の富の増加と国民の健康と生活水準の増進のための基礎的な手段であると見なします」。この議論から私たちが引き出すことができることの一つは，私たちの前にある新しい課題が，新しい倫理的問題を提起するという認識です。一例として，私たちは新しい研究者たちが，彼らの雇用状況を守ったり，向上させるために新しい著作を生み出し出版する必要がどんどんと高まっていることに批判的でなければなりません。私たちの全員が知っており，承認する準備が確かにでき

ているように，この現実がずっと続く競争状態を，すなわち，自己と他者の分類を作り出しているのです。不幸なことにこの分類が，既存の知識の変形ではなくその再生産 ── あるいは無批判的なシミュレーション ── にしばしばたどり着いてしまいます。アカデミアや教育の増大していく商業化と共に，承認と正当化を目指すこの進行している競争が，私の見るところでは，人文学で学問上の不正行為が起きることの重要な理由なのです。

終わりに，このシンポジウムで取り組んだ問いは，「人文学の学問性をどのように担保するのか」というものでした。この問いに対しては，研究者に情報を伝え指導したり，適切な倫理的実践を確実にする際に実践の倫理的規範が欠かせないということを述べる以外にはほとんど貢献できませんでした。私が博士論文に取り組んでいた時，私は社会調査における倫理についての様々な分厚い書類を読まなくてはならなかったことを覚えています。初めは，私は自分の博士課程の研究のこの部分を恐れていました。しかしながら徐々に，倫理についてのこの議論全体が実際には，私がやろうとしていたことについての私の理解を作り変え始めました。私はだからこ

シンポジウムの様子
（左から須田一弘教授，J･ブシャー准教授，F･W･グラーフ教授，小柳敦史准教授）

そ，聴衆の皆さんに社会調査における倫理について存在する幅広い材料にあたり，人文学についての新しい，おそらくはより洞察に富んだ見方をすすんで発展させることとを勧めます。私はそうした資料を今でも私のファイルの中に持っています。そして，社会調査における倫理によって意味されるものが何であるのか，私たちの分野における倫理的不正行為の様々な現れ，不正行為の事例と取り組むために何がなされうるのか，そしてもっと重要なことに，研究不正行為について正しい主張をする人をどのように守るのかを理解することに関心のある誰とでも，この資料を喜んで共有するでしょう。こうした人々は誠実さのみならず，勇気を示したことについても賞賛されねばなりません。

ありがとうございました。

（日本語訳：小柳敦史）